

## 親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④0

# 願生という深い祈り

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第98回から100回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、98回と99回では「東方偈」について、100回では「第二十二願成就文」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、98回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

### ■『無量寿経』は願生の教え

「東方偈」のなかで「その仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲せば、みなことごとくかの国に到りて、自ずから不退転に致る」（『真宗聖典』49頁、東本願寺出版、以下『聖典』）と。仏の本願力によって名を聞くということが起こるなら、その聞名もんみょうのなかに、欲生よくしやう、彼の国に生まれたいという願いが成就して、自ずから不退転に致ると。不退転、退転しないということは、仏の願心にしたがって、仏の道を求め、その道をもう外れない。だから、衆生は光のなかにあることをもう忘れない。このようなことが持続すると。

この偈文の前半の二句、「其仏本願力 聞名欲往生」が『教行信証』「信巻」の「信の一念」のところ引用されています（『聖典』239頁）。この一念を、親鸞聖人は「正信偈」で「よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり」（『聖典』204頁）と言われていて、煩惱を断たずして涅槃を得るという大乘仏教の課題が、凡夫の努力を待たずして、本願成就の救いとして一念

の事実のところになり立つのだと。つまり、衆生は煩惱具足の凡夫であるにもかかわらず、如来の呼びかけが衆生の本質には響いていて、それに気づくことは、真実信心というものが、如来の素質が、衆生にあると気づくことなのだ。

仏教は、人間の苦悩の本質は何であるかを仏が見そなわして、そこから解放しようとする。あらゆる衆生が自我の執とらわれをもち、自己関心から出られない。そのような自己関心を取り巻いて、苦悩の条件がいくらでも起ってくるのですから、それに対応し、そこから出ようとして人間は悪戦苦闘している。そこに、如来は苦悩の本質を見届けて、そこから本当に解放される場所を与えようと、こういう呼びかけが、欲生心という言葉になっているわけです。

ですから、『無量寿経』の教えは、衆生の側からすれば本当に解放される場所がほしいという願生の教えです。如来のほうからすれば、そのための方法は我が名である。名を念ぜよと。名のところに願が衆生に届く。名を通してわれわれの闇が破られ、そして、われわれにとって大事な、解放される場所が与えられるのだと。

### ■願生は如来の回向

本願成就の文にある「至心回向」というのは、本願が成就することを語っている言葉で、如来の願いが成就することを語っているのだから、如来の回向が凡夫の上に成り立ったことを表すのだと、親鸞はいただかれた。その至心回向を受けて「願生彼国 即得往生」（『聖典』44頁）と書いて

## 親鸞仏教センターの動き

(2017年2月～4月) 一抄出—

ある。願生してもまだ往生できないというのでなくて、至心回向を潜り、願生すれば即ち往生すると。それは、「名を聞きて往生せんと欲えば、みなことごとくかの国に到りて」という言葉と重なっているわけです。

願生という衆生の深い祈りは、如来の欲生心の成就として、如来の回向に値遇するという形でいただけなのだ。これが親鸞聖人が明らかにした凡夫の救いです。凡夫は凡夫のまま、名号のいわれに出遇うなら、その名号の意味に出遇うところに本願と値遇する。それは如来の大悲回向と値遇することだと。値遇することができるなら、濁世の限界と無限なる大悲の世界との接点にわれわれは立つ。こういうことが成り立つのが信の一念なのだ。

### ■願生は前の命が終わること

だから、信の一念を明らかにするために、『愚禿ぐとく 鈔しょう』で親鸞聖人は、善導大師の言葉、「前念みょうじゆう 命終 後念即生」を引いてくるわけです（『聖典』430頁）。前の命に死ねばすぐ次の命、浄土の命が始まるのだと。つまり、「願生彼国」は「前念命終」、前の命が終わるとのことだと。それは信の一念である。そして、「即得往生」は「後念即生」である。そのように、本願成就文と善導大師の言葉とを結びつけて、本願と値遇することがもたらす衆生の救いを親鸞聖人は表されるわけです。

凡夫の生活がどれだけ苦悩の命であろうと、有限の命であろうと、大悲のなかにある生活をいただいでいける。本願の救いのなかにある、大悲はすでに包んでいると信ずる。それは不退転である。不退転は正定聚しょうじょうじゆでもある。必ず仏に成る位をいただいで生きる。これは菩薩であるわけです。本願成就のところ、聞名のところに本願を聞き当てることができ、そこに、たすからない衆生がずっと歩み続けて行くことができる道が開かれるということです。

### ■2017年

- 2/3 第12回研究員と読む公開輪読会「〈行〉とは何か—『西方指南抄』を読む」担当：中村研究員①2/3②2/10③2/17④2/24（文京区・親鸞仏教センター）
- 2/6 第99回（通算第150回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/10 ご命日のつどい
- 2/21 第9回「『教行信証』と善導」研究会
- 2/22 第173回清沢満之研究会
- 2/24 第197回英訳『教行信証』研究会
- 2/27 第34回『西方指南抄』研究会
- 3/6 第100回（通算第151回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/8 第198回英訳『教行信証』研究会
- 3/10 ご命日のつどい
- 3/13 第3回清沢満之研究交流会（清沢満之と西洋哲学）〈研究発表〉「清沢哲学研究の課題と展望」親鸞仏教センター研究員：長谷川琢哉、「日本における西洋哲学の初期受容」大谷大学教授：村山保史氏、「近代仏教のなかの清沢満之と哲学」龍谷大学アジア仏教文化研究センター博士研究員：碧海寿広氏、〈コメンテーター〉関西大学教授：井上克人氏、〈司会〉真宗大谷派教学研究所研究員：名和達宣（文京区・求道会館）
- 3/25 宗教哲学学会第9回学術大会（京都大学）：長谷川研究員発表「清沢満之における信仰の獲得—「中期」の宗教哲学的諸論考を手がかりとして」
- 3/27 第10回「『教行信証』と善導」研究会
- 3/29 第35回『西方指南抄』研究会
- 3/30 第174回清沢満之研究会
- 3/31 第55回現代と親鸞の研究会「ドストエフスキイ、イエス像探求の足跡—ユダの人間論とキリスト論」ドストエフスキイ研究者、河合塾英語科専任講師、河合文化教育研究所研究員：芦川進一氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 4/10 第3回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会
- 4/14 ご命日のつどい
- 4/17 第11回「『教行信証』と善導」研究会（善導『観経疏』について）大正大学非常勤講師、浄土宗総合研究所研究員：柴田泰山氏（文京区・親鸞仏教センター）
- 4/18 第36回『西方指南抄』研究会
- 4/19 第175回清沢満之研究会
- 4/24 第12回「『教行信証』と善導」研究会
- 4/25 第14回「親鸞仏教センターのつどい」〈記念講演〉「憲法の「古稀」について考える」早稲田大学法文学術院教授：水島朝穂氏、「本願の国土」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学生会館）
- 4/28 第199回英訳『教行信証』研究会

### 掲載論文

- 3月 『井上円了センター年報』vol. 25  
長谷川研究員「ヴィクトリア時代英国における不可知論と井上円了」  
『親鸞教学』第107号  
青柳研究員「必可超証大涅槃—正定聚之機の具体相—」